災害展示の現状と課題
ー人と防災未来センター資料室の事例からー

阪神・淡路大震災記念　人と防災未来センター　資料専門員　**杉 本 弘 幸**

1．はじめに

阪神・淡路大震災記念　人と防災未来センター（以下、センターと省略）は、1995 年 1 月 17 日に発生した阪神・淡路大震災の記憶と防災・減災を伝えることを目的とする施設である。センター資料室においては、被災地で収集・保存してきた多種多様な震災資料、約 19 万点の収集・保存・利活用を行っている。

センターではこの震災資料を利用した展示を 3 階展示スペースで行っているが、現在収蔵されている一次資料約 19 万点のうち、利用されている震災資料は約 800 点に過ぎない。また、センター自体の展示手法や資料管理体制にはさまざまな批判が行われてきた。センターでは展示部門・資料部門・研究部門が分離しており、資料の収集調査段階から、展示普及にいたるまで資料の利活用を一元的に統括する部署は存在しない。展示は（株）トータルメディア開発研究所が設計し、維持管理している。

本稿では、資料部門であるセンター資料室における災害展示のとりくみを紹介し、現状と課題を明確にしたい。

2．センター展示・資料管理体制批判の展開

センターの展示手法や資料管理体制は多くの批判にさらされてきた。その主要な論点を整理してみよう。

センターにおける記憶の展示は、「震災というできごとのすべてを展示しているようでありながら，実際には震災のごく一面を一方的に伝えるものでしかなかった」、「一次資料の展示が総合的には『教訓』としてしか位置付けられていない」との指摘がみられた。記憶の展示が行われている 3 階フロアは、4 階で地震の映像，地震直後の街並みのジオラマ、復興していく町と少女の映像というように地震をはじめとする一連のストーリーが完結した後に訪れる。そのため 4 階フロアで映像を通して見たイメージを補完するものとして記憶の展示が位置付けられてしまう。また、3 階の記憶を伝える資料が「避難生活」「ボランティア」というようなタイトルの下で、つまり、特定のストーリーの下に集約され、再構成された写真とともに展示されている点である。つまり、展示が、記憶の担い手である市民の視点からは再構築されておらず、かつ災害という出来事の全体を浮かび上がらすものとしても位置付けられていないのである。

また、センターは、第１にユニバーサルな防災拠点として、第２に被災地の情報を一カ所に集約して見せ、第３にあくまでも被災経験を伝える場、として「災害ミュージアム」を捉えている。しかし、センターが描く「災害ミュージアム」のあり方に対して、批判的な意見もある。阪神・淡路大震災において、災害にまつわる記憶が市民によって自発的に記録されたことを挙げ、災害についての集団的な記憶を集積し、社会全体が記憶を喚起する装置となるような「災害文化」ともいうべき状況が醸成されつつある。そのような社会的状況のなかで、センターは、「従来型の総合防災センターから一歩踏みだし、新たな災害文化形成に寄与できるメモリアルセンターが求められている」と指摘されている。

さらに、センターでは資料の収集調査段階から、展示普及にいたるまで資料の利活用を一元的に統括する部署は存在しないことも批判されていた。常設展示や企画展も基本的に展示業者や外部のイベンターに任され、企画展の図録類の作成も基本的に行われておらず、記録に残っていない。このように展示が研究蓄積や当事者の声とは切り離されて構成されているため、被災地の多様な営みや時代性、地域性、被災体験の個別性や多様性が捨象されているとされ、災害資料の管理も様々な問題が指摘されていた。

展示手法についても常設展示がカテゴリーごとに大量の写真とともに資料が展示されているため、震災過程の大枠を知ることができても、ひとつひとつの資料にまつわる体験や来歴などが全体の中で埋没している。個別の震災体験が多くあるにもかかわらず、センターの展示は画一的で単一的な展示になっているという指摘があった。

また、研究員や資料専門員も任期付きで短時間で入れ替わるため、経験の蓄積や継承もなく、資料の寄贈経緯や内容などもわからない資料もでてきていると指摘されている。

３．資料室企画展における災害資料の活用

センター資料室では、独自に資料室企画展を行っている。その中で特に震災資料を活用した展示を取り上げて、見てみよう。

2006 年度には、防災未来館（現センター東館）１階ロビーで、「定点観測写真展－変化する街の様子とその記録－」と題し、センター所蔵資料の定点観測写真を展示した。（開催期間は 2006 年８月８日～９月 18 日）展示資料は、神戸市内の各 17 箇所を定点観測的に撮影した約 40 枚の写真であり、震災当時とその数ヵ月後、数年後の撮影、あるいは５年毎の撮影である。また被写体に関連する実物資料としてモノ資料２点も展示した。展示資料は、鷹取商店街の看板の一部「街」および神戸市灘区の側溝のふたである（写真 1）。

写真１　展示されたモノ資料

2008 年度は、センター企画展において所蔵震災資料を展示し、活用を図った。秋期企画展「水と防災」（開催期間：2008 年 9 月 9 日～ 2009 年 3 月 1 日）では、消火用水、医療用水、生活用水の 3 テーマを設定し、写真資料（5 点）とモノ資料（2 点）を展示した（写真 2）。

春期企画展「「ぼ」は防災のぼ。－災害文化用語の基礎知識、編さん中！」（開催期間：2008 年 3 月 3 日～ 4 月 26 日）では、防災・減災に関する 35 の用語を選定し、それらに関わる一次資料（紙資料 2 点、モノ資料 5 点、映像音声資料 1 点、写真資料 15 点）、二次資料（図書、映像、防災ゲーム）を展示した。なかでも展示会場の中心に据えられた「震災資料」のコーナーでは、資料室による一次資料の整理・保存を具体的に展示することができた。

2009 年度の、企画展「トルコ大地震 10 周年 トルコの子ども絵画展」（開催期間：2009 年 8 月 4 日～ 8 月 30 日）では、1999 年 8 月 17 日に発生したトルコ北西部地震から 10 周年となることを踏まえ、震災後の兵庫県をはじめ日本からの支援に感謝して被災地の子ども達から寄贈を受けた震災資料の展示と、その後の被災地の復興状況を紹介する企画展を開催した（写真 3）。

企画展「描かれた１・１７　震災絵画展 2009」（開催期間：2009 年 9 月 1 日～ 11 月 1 日）では、センター所蔵の震災資料より、阪神・淡路大震災の記憶について、絵画で記録されたものを展示公開した（写真 4）。

神戸大学附属図書館との合同資料展「資料が語る阪神・淡路大震災の記憶と現在（いま）」（2009 年 10 月 9 日～ 2010 年 1 月 22 日）では、震災直後から関係資料の収集・保存・公開に努め、連携をおこなってきた両機関の取り組みを紹介するとともに、それぞれの特色のある所蔵資料を中心に、双方の貸与資料もあわせて展示した。また、両機関の所蔵資料をインターネット上で一般に公開している「震災資料横断検索システム」についても紹介した（写真 5）。

2010 年度は、資料室企画展においてセンター所蔵

写真 2　秋季企画展の様子

写真 3　2009 年度企画展の様子

写真 4　企画展の様子

写真 5　企画展の様子

写真 6　企画展「戦後神戸の歩みと阪神・淡路大震災」

震災資料を展示し、活用を図った。企画展「戦後神戸の歩みと阪神・淡路大震災」（開催期間：2011 年 1 月 12 日～ 2 月 27 日）では、神戸の戦後史の中で阪神・淡路大震災を問い直すことをテーマに、多くの方々から提供された戦後の神戸に関する写真とともに、センター所蔵の震災資料を展示した。この展示では阪神・淡路大震災を震災発生前からの地域社会の成り立ちの中で捉えるという手法をとった。また、企画展の図録を作成した（写真 6）。

2011 年度の企画展「兵庫と水害」（開催期間：2011 年 7 月 20 日～ 12 月 4 日）では、センター所蔵資料に加えて、県内の 23 団体・個人の協力を得て、戦前からの兵庫県内の水害の歴史を展示した。昨年度の企画展「戦後神戸の歩みと阪神・淡路大震災」に引き続き、災害と地域形成をテーマに企画したもので、水害が兵庫県の都市形成や開発に影響を与えてきたことを振り返った（写真 7）。

写真 7　企画展「兵庫と水害」の展示

2014 年度の資料室企画展は、阪神・淡路大震災の震災資料の収集と保存の取組みを振り返る企画展「震災資料をつなぐ―収集・保存の軌跡―」（開催期間：2014 年 11 月 7 日～ 2015 年 6 月 28 日）を、西館 5 階資料室において開催した。震災資料には、さまざまなものが含まれる。これら震災資料が、被災地において、多くの人々や団体によって試行錯誤を重ねながら集められた経緯や、センターに所蔵された震災資料が持つ当時のエピソードや記憶と記録を今後どのように伝えていくのか、といった点に着目した（写真 8）。

写真 8　企画展「震災資料をつなぐ」の展示

以上のように資料室企画展では、所蔵する災害資料を活用するために様々なテーマで展示を行ってきた。特に近年では多くの資料所蔵機関と連携して、地域性や歴史性を組みこもうとする展示、被災体験の個別性や独自性を浮き上がらせる展示が模索されている。阪神・淡路大震災を地域史や個人の被災体験の中に落とし込もうとする手法であるといえよう。

４．災害の記憶・記録の保存と継承に関する研究

さらに、2012 年度には「災害の記憶・記録の保存と継承に関する研究」を研究部と資料室が共同で行った。問題意識としては、地域でおこった災害という出来事を伝えること、追悼すること、今後の防災・減災に資することなどが目的であるならば、歴史を主題とした博物館とは異なる災害ミュージアム特有の展示手法が求められる。災害ミュージアムが主題としているのは、ネガティブな記憶であり、その保存をめぐっては記憶を忘れたい人との葛藤がみられる。このような、ネガティブな記憶の収集・保存については、戦争や環境被害などの記憶の継承と類似した点があるが、災害ミュージアム特有の展示方法論、記憶の継承の仕方があるのではないかというものである。

次に､災害ミュージアムであるセンター内部の組織運営をめぐる課題である。展示はセンターの柱となるべき機能である。展示施設の運営管理を行う部門はあるものの、要となる展示資料に関する調査研究、保存、展示、教育普及を行う部門が不在である。学芸員というポストそのものがなく、収蔵資料の調査管理を行う震災資料専門員は非常勤、防災の研究を行う研究員も任期付という勤務体制である。また、関係部局の連携も決して良くなく、これらの状況改善の一助となればと考えていた。

調査・分析手法としては、第 1 に災害ミュージアムに関する調査研究を行った。研究員・資料専門員の専門的な視点より、災害伝承について分析･知見を深めた。具体的には、災害ミュージアム・手記・語り部・アーカイブ・資料・記念碑・災害遺構などを通した災害伝承の特徴と、効果課題を検討した。

第 2 に災害ミュージアム研究塾の開催である。災害ミュージアムを通した被災経験伝承のための取り組みについて、地域住民、研究者、ボランティア、学生などに伝えるとともに、地域住民との議論を通しよりよい展示方法について検討する場として「災害ミュージアム研究塾」を開催した。

10 月 20 日：第 1 回「阪神・淡路大震災と震災資料室の 17 年」
11 月　8 日：第 2 回「被災経験継承のために―複数の展示拠点とネットワークづくり」
12 月 16 日：第 3 回「東日本大震災の文化財レスキューと展示活動」
1 月 26 日：第 4 回「地域を拠点とした被災経験の継承―阪神・淡路大震災と東日本大震災」
2 月 10 日：第 5 回「長田区役所職員による阪神・淡路大震災の記憶継承の取り組み―人・街・ながた震災資料室の事例―」
3 月　9 日：第 6 回「災害記念館からジオミュージアムへ」

第 3 に他の地域における災害ミュージアムの活動調査である。他の地域における災害ミュージアムの活動調査、東日本大震災の被災地において記録の収集・展示などを始めている関係機関へのヒアリング調査などを行い、それを踏まえた資料展示のあり方を検討した。北海道南西沖地震の被災地である奥尻島、雲仙岳の噴火災害の被災地である島原、中越地震の被災地であ

る長岡を中心とした地域における災害ミュージアムの活動状況を調査した。

2013 年度もこの共同研究は行われたが、その後は行われてない。

この共同研究はセンター研究部と資料室の連携による災害展示を再考しようという重要なプロジェクトであったが、関与した研究員と資料専門員の退職により、現在に継続されなかった。

5．スポット展示「震災資料のメッセージ」

資料室では 2013 年度より、センターに寄贈されている資料のうち、これまで公開されてこなかったモノ資料を中心に、テーマに沿って西館 3 階の常設展のスペースに順次スポット展示として紹介した。

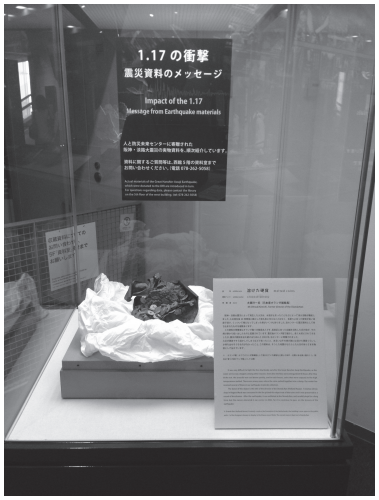

写真 9

1 年目は「震災資料のメッセージ－ 1.17 の衝撃－」というテーマで、阪神・淡路大震災での直接的な被害を象徴する実物資料を、資料にまつわるエピソードとともに、被害の種類別に展示した。2013 年 5 月～ 7 月は、震災で割れた壺を展示した。2013 年 8 月～ 10 月は、阪神・淡路大震災直後に起きた火災によって溶けて塊になった硬貨を展示した。この硬貨は、長田区で焼失した中華料理店から拾い出されたものである（写真 9）。2013 年 ll 月～ 2014 年 1 月）は、液状化の衝撃を伝える資料として、小学校のグラウンドから噴出した砂を展示した。2014 年 2 月～ 4 月は、火災の衝撃を伝える資料の第二弾として、長田区の焼失した住宅から拾い集められた焼け焦げたキーホルダーを展示した。

震災 20 年を迎えた 2014 年度は「資料で、あのときをのぞいてみよう」をテーマとし、資料を、寄贈者への聞き取りを行ったうえで、西館 3 階に展示した。2014 年度の特集テーマは「被災地へ水を運んだポリ容器」（2014 年 9 月 30 日～ 11 月 30 日）、「自転車で日本一周」（2014 年 12 月 2 日～ 2015 年 2 月 1 日）（写真 10）、「当時活躍した機械」（2015 年 2 月 3 日～ 4 月 5 日）であった。

写真 10

3 年目の 2015 年度は「食」をテーマとし、震災時のライフラインや救援物資、炊き出しなど、さまざまな「食」に関連する資料を西館 3 階の展示フロアの一角で展示した。「命を守るための水」（2015 年 6 月 2 日～ 8 月 30 日）、「心をいやした救援物資のあまいモノたち」（2015 年 9 月 1 日～ 11 月 29 日）（写真 11）、「炊き出し―調理器具（1）―」（2015 年 12 月 1 日～ 2016 年 2 月 28 日）、「食卓―調理器具（2）―」（2016

写真 11

写真 12

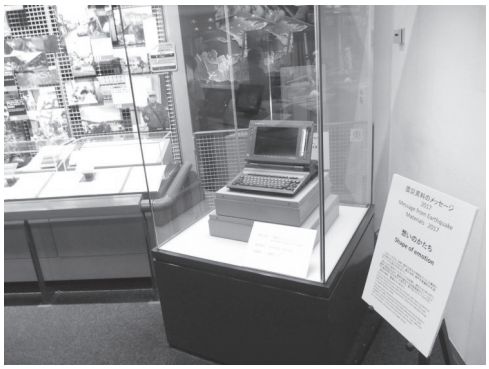

写真 13

年 3 月 1 日～ 5 月 29 日)。

4 年目の 2016 年度は「1.17 と鉄道・道路」をテーマとし、都市の生活を支える交通網の被災状況と復旧・復興に関する資料を西館 3 階の展示フロアの一角で展示した。「1.17 と鉄道」(2016 年 5 月 31 日～ 10 月 30 日)(写真 12)、「1.17 と道路」(2016 年 11 月 1 日～ 2017 年 3 月 26 日)。

5 年目の 2017 年度は、「想いのかたち」をテーマとした。震災後、残された人々は、さまざまなモノに、亡くなった人々への想いや祈りを託した。そのあり方を震災資料から振り返った。2017 年 5 月 30 日～ 11 月 26 日まで、「工藤純さんのワープロ」を展示した。このワープロは、当時、神戸大学の大学院生だった工藤純さんのものである。震災当時、神戸市東灘区の木造アパートから取り出された。純さんの下宿先だったアパートは全壊し、純さんは 1 月 19 日に遺体で発見される。捜索作業をする自衛隊員から「一つだけなら遺品を取り出せます」と言われ、取り出したワープロである。現在は壊れ、電源は入らない (写真 13)。第 2 期は 2017 年 11 月 28 日～ 2018 年 5 月 27 日まで「亡妻が大切にしていたが震災でこわれた観音像」を展示している。寄贈者の方は、「震災当日の朝、タンスは倒れずにすみましたが、多くのものが割れました。その一つが震災前になくなった妻が、神戸そごうの展示会で購入した観音像です。食器棚の上に飾っていましたが、落下して無残にも手足が飛びちってしまいました」と語られた。奥さまが大変気に入っていたので、捨てることができず、保管されてきたものだった。

「震災資料のメッセージ」の開始には、常設展示がカテゴリーごとに大量の写真とともに資料が展示されているため、震災過程の大枠を知ることができても、ひとつひとつの資料にまつわる体験や来歴などが全体の中で埋没してしまっているという問題意識があった。個別の震災体験が多くあるにもかかわらず、センターの展示は画一的で単一的な展示になってしまっている。

展示スペースの都合でわずかではあるが、常設展示の中に所蔵資料の中から多様な震災体験をつたえていく試みの一つである。

5．おわりに

以上、本報告の要旨をまとめる。センターの展示手法や資料管理体制は多くの批判にさらされてきた。

資料室では、第１に独自に資料室企画展を行っている。その中で様々なテーマで震災資料を活用した展示を行ってきた。近年では多くの資料所蔵機関と連携して、被災地域の地域性や歴史性を組みこもうとする展示、被災体験の個別性や多様性を浮き上がらせる展示が模索されている。阪神・淡路大震災を地域史や個人の被災体験の中に落とし込もうとする手法である。

第２に２年間しか行えなかったが、「災害の記憶・記録の保存と継承に関する研究」を研究部と資料室が共同で行った。その問題意識はセンターの展示や運営体制の批判に答えようとする試みだった。

第３にセンターに寄贈されている資料のうち、これまで公開されてこなかったモノ資料を中心に、テーマに沿って西館３階の常設展のスペースに順次スポット展示として紹介した。常設展示がカテゴリー毎に大量の写真とともに資料が展示されているため、震災過程の大枠を知ることができても、ひとつひとつの資料にまつわる体験や来歴などが全体の中で埋没してしまっているという問題意識があった。個別の震災体験が多くあるにもかかわらず、センターの展示は画一的で単一的な展示になってしまっている。常設展示の中に所蔵史料の中から多様な震災体験をつたえていく試みの一つであった。

さまざまな課題があるが、今後も災害資料の利用と活用に取り組んでいきたい。

参考文献

・板垣貴志「震災資料の可能性―人と防災未来センターと歴史資料ネットワークでの活動報告―」（『歴史科学』204 号、2011 年）

・板垣貴志「災害資料の課題と展望―阪神・淡路大震災後の研究蓄積を共有するために―」（『日本史研究』597 号、2012 年）

・奥村弘『大震災と歴史資料保存―阪神・淡路大震災から東日本大震災へ―』（吉川弘文館、2012 年）

・大門正克「バーコードに閉じ込められた言葉」（同『歴史への問い／現在への問い』校倉書房、2008 年）

・笠原一人「序　記憶のアクチュアリティへ」（笠原一人・寺田匡宏編『記憶表現論』昭和堂、2009 年）

・児玉州平「災害展示の方法を考える―人と防災未来センター資料室の取組から―」（『日本史研究』604 号、2012 年）

・［記憶・歴史・表現］フォーラム『いつかの、だれかに　阪神・大震災・記憶の「分有」のためのミュージアム構想展』（同、2005 年）

・阪本真由美・矢守克也「災害ミュージアムを通した記憶の継承に関する一考察 ―地震災害の

ミュージアムを中心に―」（『自然災害科学』29 号、2010 年）
・阪本真由美「記憶のメディアとしての災害ミュージアム」（阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター編『災害の記憶・記録に関する調査報告―災害ミュージアム研究塾―』（2013 年）
・同「災害ミュージアムという記憶文化装置－震災の想起を促すメディア」（山名淳・矢野智司編著『災害と厄災の記憶を伝える―教育学は何ができるのか―』勁草書房、2017）
・佐々木和子「震災を次代に伝えるために―震災アーカイブの構築―」（奥村弘編『歴史文化を大災害から守る　地域歴史資料学の構築』（東京大学出版会、2014 年）
・季村範江「メモリアルと防災」（「瓦版　なまず」13、2002 年）
・杉本弘幸「災害資料収集・保存の現状と課題－人と防災未来センター資料室の事例から－」（『第 25 回全国科学博物館協議会研究大会報告要旨集』2017 年）
・杉本弘幸×矢賀部仁「阪神・淡路大震災記念　人と防災未来センター資料室－震災アーカイブの先駆け　神戸の教訓に学ぶ－」（金剛株式会社『PASSION』VOL.39、2017 年）
・高森順子「地域に暮らす人々を主体とした「災害ミュージアム」のあり方―被災を面的に見せる「中越メモリアル回廊」の事例を手かがりに―」（阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター編『災害の記憶・記録に関する調査報告―災害ミュージアム研究塾―』（2013 年）
・竹沢尚一郎「阪神・淡路大震災記念　人と防災未来センター」（竹沢尚一郎編『ミュージアムと負の記憶―戦争・公害・疾病・災害　人類の負の記憶をどう展示するか―』東信堂、2015 年）
・寺田匡宏「「無名の死者」の捏造―阪神・淡路大震災のメモリアル博物館における被災と復興像の演出の特徴―」（木部暢子編『災害に学ぶ―文化資源の保全と再生―』勉誠出版、2015 年）
・同「神戸という記憶の場―公的、集合的、個別記憶の相克とすみわけ―」（清水展・木村周平編著『新しい人間、新しい社会―復興の物語を再創造する―』京都大学学術出版会、2015 年）
・阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター編『災害の記憶・記録に関する調査報告―災害ミュージアム研究塾―』（2013 年）
・同編『年次報告書』（平成 14 年度～平成 28 年度）
・阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター資料室編『震災資料集 vol.1　阪神・淡路大震災における住まいの再建―論説と資料―』（2012 年）
・同編『震災資料集 vol.2　所蔵資料図録―暮らしのなかの震災資料―』（2016 年）
・吉川圭太・児玉州平「阪神・淡路大震災の震災資料をめぐる現状と課題 －人と防災未来センター資料室の取り組みから－」（東北史学会『歴史』118 号、2012 年）